

# 教 仏 庵 草

第149号  
(発行日)  
2002年11月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638126 西宮市  
小松北町1-2-3  
電話・FAX(0798)  
41-5346  
(発行人) 土井紀明  
mail:kimyou3@zeus.eonet.ne.jp  
http://members.tripod.co.jp/souan211

## 《 聞法会ご案内 》

- \* 同朋の会 (念佛寺)  
22日午後2時  
.....
- \* 聖典講座 (念仏堂)  
第1土曜日午後3時
- \* 念仏座談会 (念佛寺)  
第3土曜日午後3時

## 何が浄土に生まれるか

Q 「真宗の教えでは浄土に往生するということをよく聞きますが」

D 「ええ、浄土に往生して仏に成らせていただくといっています」

Q 「その浄土とは何ですか」

D 「浄土には三つほどの意味があると思います。第一に浄土とは無明煩惱が完全に浄化されたさとの領域であり、第二にそこにおいてさとりを開く領域であり、第三に、迷いの世界に働きかけて穢土を浄化する働きとしての浄土です」

Q 「さとりとは何ですか」

D 「縁起の真実に目覚めて自他一如——自分と自分以外を一体のごとく——と覚醒することだといわれています。そのような認識をさとりの智慧と申し、仏智といわれています」

Q 「では迷いとは」

D 「仏智とは逆に自他を分離し、知るものと知られるものを分けて、自分と自分以外のものを別々にそれだけで存在すると見る誤った見方のことです」

Q 「大変難しいのですが。もう少し易しく説明してください」

D 「私と私以外の人とは別と感じ、私と環境・私と世界を別のものと思ひ、私は私以外の何ものでもないと思ひこんでいる、

そういう錯覚を迷いと言われている

Q 「そうすると、私たちがへいぜい思ったり感じたりして当たり前前にしているものの見方がすでに迷いといえますね」

D 「そうですね。ですから仏のさとりの智慧というのはたとえば大無量寿経に

〈もろもろの衆生において、視わすこと自己のごとし〉

とありますが、そのように感知しているような智慧のことだといっているのでしょうか」

Q 「この経文の意味はどういう意味ですか」

D 「生きとし生けるものを自分と別のものと見るのではなく、すべてのものを自己自身のごとくに見る、そういう智慧を仏の智慧(仏智)といひます。世界を自己と見るような広大な智慧です」

Q 「難しくてまだまだ了解できませんが、大変尊い認識(智慧)だということはわかります」

D 「浄土に生まれるとそういう智慧が開かれるといわれています。いわば仏智が開かれ仏智(仏)そのものに成るといわれます」

Q 「浄土に生まれて仏に成るといひのは、自他一如の仏の智慧が開かれて、迷い心が消滅する

ことですね」

D 「そういわれています」

\*

Q 「ではこの世(穢土)にいる私たちが浄土に生まれるという場合、一体何が浄土に生まれるのですか」

D 「外ならぬそう言っているあなたが浄土に生まれるのだといえましょう」

Q 「この私がですか」

D 「そうですね」

Q 「こうしてしゃべっている私とは何ですか」

D 「思ったり考えたり選んだり、行動を決めたり、話をしたり、悩んだりしている当体です。すなわち自我です」

Q 「普通、私とか俺とかいっているのは自我ですね」

D 「ええそうです」

Q 「その自我が浄土に生まれるのですか」

D 「そういうことになりましよう」

Q 「浄土に生まれると自我はどうなりますか。何か靈魂のようなものになるのですか、それとも光り輝くものになるのですか」

D 「いいえそうではないでしょう。浄土に生まれると自我そのものが無くなるのだといえましよう」

Q 「浄土に生まれると自我がそのものが無くなるなら、生まれるとはいえないと思ひますが」

D 「普通の意味での(生まれる)とは違ひのしょう。普通は卵からヒヨコが生まれるように、あるいはほ乳類から赤子が生まれるようなことを連想しますからね。ところが自我が何かとして生まれたり、違ひた形に生まれ変わるといひのではなくて、自我が無くなるという生まれ方ですから、わかりにくいと思ひます」

Q 「無くなるという生まれ方というのはわかりにくいですね」

D 「そう思ひます。ですから親鸞聖人が大變敬われた中国の曇鸞大師という浄土教の祖師は浄土に生まれる生まれ方は(無生の生)と表現されました」

Q 「無生の生とは」

D 「私ども凡夫の考えで、生まれるというような生まれ方で無い(無生)生まれ方(生)という意味です」

Q 「そうですね。凡夫の思うような生まれ方ではないので無生、そういう生まれ方(生)なのですか」

D 「そうですね。自我が浄土に生まれると自我は無くなり、さとりの仏智そのものと成るのでしよう。仏教の専門用語では転識得智といひます。迷いの自我意識を転じて仏智を得るといひます」

Q 「浄土に生まれると自我は無くなつて仏智となる、それを成

仏というのですね」

**D** 「そう理解しています。たとえていえば、塩人形が海に入れば溶けて海の水そのものとなるように。あくまで譬えてみればのことですが」

**Q** 「海は何を譬えていますか」

**D** 「無量光明土としての浄土を譬えています。光明は智慧を意味します」

**Q** 「塩人形が海に入れば、何かに生まれ変わるのではなくて、溶けてしまつて海の水になるごとく、自我が無くなって限りない仏の智慧と一つになるのですね」

**D** 「そう受け取っています」

\*

**Q** 「なぜ、この世のいのち(身)が終わらなければ仏になれないのですか」

**D** 「それは身体があるかぎり、自我が必要でし、自我も身体がなければ働けないのです。それはちょうど車と運転手の関係です。車だけあって運転手がなければ、車として動かせませんし、また運転手がいても車がなければ働けません。身体があるかぎり自我はついて回ります」

**Q** 「では身体としてのいのちが終れば自我は必要ありませんから、身体の命が死ぬと自我が消滅して仏智(仏)に成るのですか」

**D** 「人は死ぬとすべて浄土に生まれて仏になるかという、実は仏教ではそういわれていませ

ん。阿弥陀仏にこの世で撰め取られて人(自我)は浄土に生まれるが、阿弥陀にであうことなく自我を私のすべてだと妄執している場合は、身体が死んでも、自我の妄執は新たな迷いの生を受ける(感受する)と説かれていきます。いわゆる流転すると説かれています」

\*

**Q** 「阿弥陀仏にであっている人(自我)は、命終して自我を滅して仏智に転じる、それを浄土に生まれて仏(仏智)に成るというのですね」

**D** 「そう聞いています。阿弥陀仏の撰取にあずかる時信心が定まり、信心が定まるとき往生は定まると聖人は仰せられます。聖人のお手紙の中に

〈真実信心の行人は、撰取不捨のゆえに、正定聚のくらしいに住す〉

と云われています。阿弥陀仏の本願を信じる信心をいただいた人は阿弥陀仏に撰め取られた人であるから、正しく浄土に生まれることの定まった人の仲間(正定聚)に入ったのだといわれるのです」

\*

**Q** 「浄土に生まれるということはまだよく分かりません。どういう事態を考えればいいのでしょうか」

**D** 「浄土は無量光明土ともいわれていますが、(土)というのは

世界とか領域とか次元という意味で、世界といつてもこの地球とは別に存在するような物理的な場所というようなものではないことはいうまでもありません」

**Q** 「領域とか次元というのがわかりやすいですね」

**D** 「浄土は無量光明土であるということは、無量無辺で、どこまでも光明なる領域が浄土ということですよ」

**Q** 「どこまでも光明ならざるはない世界が浄土なのですね」

**D** 「ええそうです。そうしますと今の私たちの世界も浄土の世界だということですよ。もしここ

は浄土ではないのなら、浄土には限界があることになり、どこまでも光明世界としての浄土ではなくあります。どこも浄土ならざるはなしというのが無量光明土ですから」

**Q** 「そうするとこの世を娑婆とか穢土というのはどうしてですか」

**D** 「穢土というのは人間の煩惱によつて作り上げた、いわば虚構された世界です。この世が濁悪なのは人間の欲や怒りや愚かさ

が渦巻いて、その煩惱によつてこの世が燃え上がっているような状態を作り出しています。けれども煩惱が生み出した穢土は、浄土の中でそういう穢土を作り上げてい

るのである、その上に穢土の状況

を虚構しているのだというのが仏教の見方です」

**Q** 「そうすると、穢土は人間の煩惱で仮に作った世界。浄土こそ本来の純粹な事実の世界。穢土は煩惱で作りあげた世界なのですね」

**D** 「ですから、お釈迦さまがさとりを開かれた時、(草木国土悉皆成仏)と讃嘆されたといわれています。万物は仏の光に輝いていると驚かれたのです。ただ私たちが凡夫にはそのように感じられません」

\*

**Q** 「なぜ私たち凡夫は本来ある純粹な浄土を感じられないのですか」

**D** 「煩惱の心でしかものが見えないからです。ちょうど黒い雲に覆われると真つ青な天空が見えないのと同じです」

**Q** 「なるほど。真つ青な美しい天空こそいつもある空の青さです。ところが厚い雲がかかる

と、雲の下にいる私たちは美しい青い空が見えない。それは雲のせいだといえますね」

**D** 「浄土を私たちに感得させない雲のようなものが煩惱の心であり迷いの心なのです」

**Q** 「そうすると、浄土に生まれるというの

は、その雲が消える

と真つ青な美しい青い空が現れるようなものなのですね」

**D** 「そういえるのではないでしょう

か。迷いの自我執着の意識

の雲が無くなると、浄土が露わ

となるのですね。それを浄土に

生まれるというのでしよう。し

ばしば私どもの迷いの状況を蚕が繭に閉じこめられているようなものに譬えられます」

**Q** 「蚕が繭の中

にいるようなのが私たち煩惱の衆生のすがたなの

ですね」

**D** 「ええ。蚕は自分の口から出

す糸によつて自分

をがんじがらめにまいて、その中に閉じこ

める。そのように私たちの生みだ

した迷いの煩惱の糸によつて、

迷いの状況の中に閉じこめ

れている、そういう状態。そ

ういう状態から、おのれの繭を破つて

蚕が外の明るくて広い世界に出

るように、煩惱の迷いのか

いを破つて限りなく広大な浄土

の世界に出る。そういうのが浄土

の生まれ方だと思

います。ただし、蚕が外に出

て、蚕という身を維持するとい

うのではありませ

ん。先ほども言

いましたように

に自我の妄執は

転じて仏智にな

る。そこに煩惱

が消えて浄土が

顕現するとい

えます。歎異

抄に

〈生死の苦海を

わたり、報土の

きしにつきぬ

るものならば、

煩惱の黒雲は

やくはれ、法

性の覚

月すみやかに

あらわれて、

といわ

れている

ように、

煩惱が

消える

ならば、

法性の

覚月とい

う本来の

純粹な

浄土の

境界が

現れる

といわ

れています

」

**Q** 「浄土へ

生まれる

とはどう

いうこと

か少しわ

かってき

ました」

(了)

# 歎異抄 第十二章第六講

故聖人のおおせには、「この法をば信ずる衆生もあり、そして衆生もあるべし」と、仏ときおかせたまいたることなれば、われはすでに信じたてまつる。またひとありてそして、仏説まことなりけりとしられそうろう。しかれば往生はいよいよ一定とおもいたまうべきなり。あやまつて、そしてひとのそうらわざらんにこそ、いかに信ずるひとはあれども、そしてひとのなきやらんとも、おぼえそうらいぬべけれ。かくもうせばとて、かならずひとにせしられんとはあらず。仏のかねて信謗しんぼうともあるべきむねをしろしめして、ひとのうたがいをあらせじと、ときおかせたまうことをもうすなり」とこそそうらいしか。(歎異抄第十二章)

現代語訳(今は亡き親鸞聖人は、「この念仏の教えを信じる人もいれば、謗そる人もいるだろうと、すでに釈尊がお説きになっていきます。わたしは現に信じておりますし、一方、他の人が謗そることもありますので、釈尊のお言葉はまことであつたと知られます。だからこそ、往生はますます間違いないと思ふのです。もしも念仏の教えを謗そる人がいなかったなら、信じる人はいるのに、どうして謗そる人はいないのだろうかと思つてしまふに違いありません。しかし、このように申したからといって、必ず人に謗そられようというのではありません。釈尊は、信じる人と謗そる人とがどちらにもいるはずだとあらかじめ知つておいでになり、信じる人

が疑いを持たないようにとお考えになつて、すでにそれをお説きになつていて、いうことを申しているのです」と仰せになりました。)

\* \* \*

真宗の教えに感激し聞法に心がけるようになった人たちの中には「こんな有難くて尊い教えだから、誰もが敬うやまい尊ぶにちがいない」とか「誰もが仏法を信じて当然だ」と思いがちです。ところが実際は仏法に耳を傾ける人は少ないのです。それどころか仏法を批判したり非難する知識人もいます。そうすると、仏法に帰依きえしている人や信じようとしている人たちの中には「仏法は本当に確かな救いなのだろうか」とか「仏法はたいしたものではないのではないか」とか「仏法は社会に通用しないのではないか」というような疑問や動揺どうようがおこります。こういう事態は唯円房の時代も現代も同じでしょう。そういう疑問や動揺どうようにおちいつている人たちに、『無量清浄平等覚経』や『大集経』などの經典の中に「仏法を聞いて素直に信じる衆生もあれば、聞けども信じない衆生もいる」と説かれていたことをうけて「この法をば信ずる衆生もあり、そして衆生もあるべし」と、仏ときおかせたまいたることなれば」とここで示しておられるのでありましょう。

ここで「この法」というのは本願念仏の法です。この法を聞いて喜ぶ人もあれば、信じない人もあり、また誹ひる人もあるのだと、あらかじめ仏がお説きになつてから、誹ひる人が出てきても、こういうことは仏様がすでにお説きになつてある通りだから、ますます仏説の確かなことを思い、仏説に信頼して本願を信じ

念仏申すべきだといわれるのです。

だいたい仏法を批判する人は、その時代の知識人でありましょう。江戸時代の儒者じゆしやたちからは「仏教は親の恩に背く」と誹ひられました。なぜなら、儒教倫理では親に孝行こうこうをすることを大事な徳目にしていてのですが、出家を勧める道も説かれる仏教は親への報恩ほうおんを軽んじると批判されました。明治以後では、「釈迦と天皇はどちらが上か」というような議論から、仏教は天皇を軽んじるとか、愛国主義者からは仏教には国を愛する思想がないとか、また社会主義者からは仏教は社会変革に対する保守反動の思想であるとか、キリスト教からは仏教には倫理なかんずく社会倫理がないとか、科学者からは阿弥陀だの浄土だのというのはどこにも検証できない空想の産物であるとか、さまざまな批判や非難がなされてきました。そうした批判や非難の中には多くの誤解ごかいもあれば、また単に仏教を貶おとしめるためだけの批判もあります。また逆に仏教が反省すべきものやさらには今後展開てんかすべき課題を指摘ししてきした批判もあります。

つつしんで反省すべき批判や今後さらに究明すべき点を教えられる建設的な批判はよく心せねばなりません。しかし、仏法なかんずく浄土の教にたいするさまざまな非難や批判に振り回されて、せっかく念仏の教にないながらお念仏への信を失うことは残念なことです。

お念仏の教にないながら、お念仏に対する信を捨てたりあるいは動揺どうようしたり、あるいは信がいつまでも定まらない要因は、阿弥陀仏の智慧に観みられていて(人間、本願のお目当てとしての人間が、我

が身のこととして受け取られていないからです。

「私とはどういう人間か」という点が見極められていないから、社会変革の思想とか人間愛の倫理とか科学的合理主義や聖者志向や超能力など、さまざまな理想や正義や清らかなものに心が惑まどうケースが多いのです。

己の人生に破綻はたんし、私は私以外になれようもなく、私はこの私でしか生きられないという、我が身の限界を知つた時、聖人の云われる「いずれの行(道)もおよびがたき身」としての自己にぶつかつてしまった時、もはや「ただ念仏して弥陀に助けられまいら」する外にどこに私の道があり、この世に処を得しめられましょうか。いずれにも行くべき道のなき人間は、「極重悪人よ、我が名を称えよ」との弥陀の仰せに帰するほかに道が無くなるのであります。

要するに他から批判されたり誹そられたりして動揺する要因は、我が身を知らなからといえましょう。

あえて申せば本願念仏は、社会の指導者層や知識人たちにはなかなか受け取りがたいでしょう。なぜならお念仏の教は、指導する側より指導される側の人間、社会を浄化しようという側よりも浄化されねばならない側の人間、手本になる人間の側より手本になれない側の人間、賢者よりも愚者、社会の上層部よりも社会の底辺に生きる人間、支配者の側の人間より支配される側の人間、そういう人間の間にごとに受け継がれ根付いてきた教なのです。

# 自我のはからい

宗教について、私たちの常識は「幸福になるために宗教を信じる」と思っています。そして、その求める「幸い」は人によって違いがありましようが、多くの人は無病息災や商売繁盛などという幸いを求めて神や仏に祈ったり、お祓いを行います。

ところでこのような信心は、自分（自我）の生存の確保や安全にとって都合の良い富や健康などの「ご利益」を得て、それによって自我を守り、自我を安定させようとして神仏に祈願をする、そのような自我中心の信心と言えます。

神仏に御利益を祈願するだけではありません。私たちの自我は自分をより高く価値づけ、自分を充実させ、輝かしい私になろうとし、また自分にも他者にも称賛されるような、そういう「幸せな私」になろうという自我関心（我執）から宗教を求める場合もあります。

私たちは欲少なくて情け深く、社会に献身的に奉仕するような「できた人」として、自他ともに認める「価値ある人」になるために宗教を求めるとか、あるいは、ドカーンと一発悟りを開くことによって素晴らしい境地に達しようと思つて修行するとか、あるいは、真宗の妙好人のような有り難い他力信心の人になることがまことの幸せと思つて、そうした幸いを求めて弥陀を信じようとして聞法や研修に励んだりもします。

しかしこのような宗教を求めるプロセスの底にも、自我を守り、高め、自我を栄光化しようという我執我愛の心が根を張っていないとは言えないのです。それはややもすると本来自我否定の道である宗教が、かえって自我を強固にし肥大化する手段になりかねません。（この極端な例がオーム真理教の場合）

むしろ、「幸いを求める」自我の営みの一切が、求法聞法の途上で無効となり、無力となり、自我の計らいのすべてが破綻して「出離の縁あること無き我が身」と、骨の髄から知らされる時、求めても求めても得ることが出来なかつた真実の幸せが、真実そのものからの全き恩恵として与えられることを知るでしょう。（了）

# 信仰夜話

## 「如説院恵鈿講師の言葉」

○すかさされようかと用心し、間違うかとは分別してかかるなら信ずると云うものではない、知ると云うものじゃ。してみる。と弥陀の本願はいらぬものになる。又、信心の得られぬ訳は、仏の仰せを信ずる信心で、往生すべき道理を信ずるのではないと云うことを、よくよく合点せぬからの事じゃ。（如説院師の言葉）

弥陀の本願は仏の智慧より現れた衆生

救済の不可思議の法である。不可思議の法とは凡夫の思議で了解することが「不可」能な法であるということ。「名号を称えんものをば極楽へ迎えん」という弥陀の誓願はまことに不可思議の法である。不思議といえば、弥陀の本願ばかりではない。一輪の花が咲くことも、太陽の周りを地球が回ることも不思議という外はない。そういう不思議を仏教では龍力不思議だの衆生多少不思議だのといっている。それらよりもさらに不思議なのが弥陀の本願といわれていて、聖人の「高僧和讃」に

「いつつの不思議をとくなかに

仏法不思議にしくぞなき

仏法不思議ということば

弥陀の弘誓になづけたり」

とあり、弥陀の誓願は不思議の中の不思議で、五つの不思議のなかで最も不可思議なものであるといわれている。

であれば、この本願のわけを聞いて分別し、なつとくし、本願の道理を聞きわけ知りわけて「間違いない」と落ち着こうとする。それは不可能なことである。そこには「弥陀の本願にすかさされまい」という魂胆があるともいえる。

本願の道理を了解して、浄土へ往生する道理やすじみちを信じるのでもない、不可思議な本願の仰せを不思議と平に信じるのである。（了）

## 〈住職つれづれ雑感〉

\* 拉致問題やらロシアのテロ事件やらで、新聞記事も明るいニュースは少ないこのごろである。そんな中寒くなり出すと早いもので、暑い暑いこの前まで言っていたのがもう暖房機を出す始末である。

だんだん老年への入り口にさしかかると、わざわざいいことがおっくうになって、人間関係も単純で簡素でありたいと望むようになる。世間的なつきあいを少なくしようとする、世間の礼儀を知らない、気のつかない人という非難・批判をまぬがれない。が、これも仕方があるまい。

\* 毎月二十二日の同朋会は、念仏寺が念仏教会であった時代から続いている例会である。毎回の参詣者は十人ほどであるが、時には一人という時も何度もあった。そんな時もほとんど欠かさず参詣されたN・Tさんも、最近御足が大変弱られて、同朋会への出席も出来なくなつた。しかし、今まで本心に良くお参りくださったと感謝に堪えない。同朋会の顔ぶれは年々少しずつ変わって、最初の方は亡くなられて今は一人もおられない。十七年もたつと顔ぶれの状況は随分変わるけれども、新しく参加される人が続いでくださるのが有り難くまた不思議である。

\* 十月十三日。N・Mさんのお参りの帰りに開明小学校で開かれていた西山郷友会の運動会を見に立ち寄る。公明党幹事長の冬柴氏がちょうど挨拶されていた。

\* 一〇月二六日。響命精舎の報恩講にお参りし、安城師の御法話を聴聞させていただく。お食事を共にし参詣の方々とはしばし語り合う。

## 【念佛寺報恩講】

講師 響命精舎主管

十二月二十二日（日）

午後二時より

林 一宗 師